65周年迎え 将来像を策定

木材塗装研究会

会長 鈴木 雅洋

明けましておめでとうございます。

新年を迎え、日頃からお世話になっている関係者の皆様に改めて厚く御礼申し上げます。

昨年は、デルタ株の猛威に恐れおののいていた時期を乗り越え、日本では秋から年末に向け、新規感染者がにわかに減少しました。もしかするとこれで収束かとも思えるところにオミクロン株の登場です。未知なるものへの不安と感染力が高いことは確からしいという情報のもと、第5波を超える第6波の流行を最小限に収めるべく配慮が当分続きそうです。

WHOによるとオミクロン株もデルタ株同様「懸念すべき変異株」の1つでありVOC（Variants of Concern）に分類されています。塗装関係者でVOCといえば、揮発性有機化合物（Volatile Organic Compounds）であり、環境汚染や健康被害の筆頭に挙がる課題の略称です。絶えず変異を起こしていくコロナウイルスのVOC登場で、塗装関係のVOCの知名度も上がり、これが削減の方向に繋がることを願います。

さて、今年は木材塗装研究会（以下、木塗研）が設立から65年目を迎えます。2012年に55周年記念事業として木塗研が歩んできた歴史をまとめた記念誌を発行しました。早いものであれから10年が経過しました。少々中途半端な年数とコロナ感染拡大防止の観点から祝賀会を開催することはできませんが、今年はコロナ禍の状況を含めて、その後の10年間の記録としてしっかりとまとめる良い機会と捉えています。

過去を振り返るだけではなく、10年先の75周年や35年先となる100周年をターゲットイヤーに、中長期的な観点から考える木塗研の将来ビジョンを検討してみようと思います。

将来を考えるということは、過去を紐解き、今を知り、これから先をそこから推察することにほかなりません。これまでの技術を学び、現状の情報を収集しそれらを検証することで、見えてくる課題と木材塗装の将来のあるべき姿のために今必要な取り組みが明確になってくるはずです。そのためには過去の技術、技能、木材塗装の基本を習得し後世に正しく継承することがとても大切になってきます。木塗研の財産ともいえるベテラン運営委員のさらなる尽力と若手委員の情熱に期待するところです。

木塗研の活動には、委員同士で実施する技術情報交換会や委員が講師を務める委員研修会があり、委員一人ひとりのレベルアップを図ることにも注力しています。昨年の8月と11月に開催した2つの委員研修のテーマ（講師）について、その概要をご紹介いたします。「木工塗装の水性化」（㈱谷津商店　代表取締役　谷津委員）と「ウッドショックの現状と課題」（東京大学　高橋委員）です。

前者は静岡県内の木製品製造企業が、これまで外注していたウレタン塗装の内製化を図る際、水性塗料を選びシステムの導入に踏み切った経緯と結果の実例報告です。木材の性質から水系化が難しい塗装系を敢えて選択し技術的な苦労はあったが、企業としてのSDGs宣言を果たし職場環境の改善に繋がり、女性社員の現場進出などのメリットがあったことも大きな成果としています。先を見据えた挑戦的な企業の取り組みにエールを送るとともに、谷津委員の献身的な技術支援に感謝と敬意を表します。

後者は第3次ウッドショックについて、世界の木材市場でいったい何が起こっているのか、日本への影響や国産材のチャンスは生かせるのかといった切り口から、原因や今後の見通しなどについて、国内外のデータに基づき解説してもらいました。欧米に直接出向き現地の状況に詳しい高橋委員ならではの情報を伺うことができました。

委員研修会は年4～5回の頻度で毎回20名ほどのメンバーが参加します。昨年からはすべてがオンラインとなりました。当初は不慣れな操作や接続環境の不備などからスムーズな進行とならず会議に支障がありましたが、今ではこのコミュニケーションツールのメリットを享受できる状況となっています。会議室確保等の事前調整や、どこからでもリアルタイムに出退席できるといったメリットは、アフターコロナの世界でも活用すべきものと考えます。ただし、便利で効率的な反面、参加者への微妙な配慮が求められるデリケートな打ち合わせや繊細な技術や感覚を伝える場面では、オンラインはできるだけ使わないほうが良いということも明らかになってきました。視覚や聴覚はデジタル化され使える道具になりましたが、味覚と嗅覚、触覚は十分なデジタル化ができていません。木材塗装は被塗物である木材自体がもつ特殊性から、他分野の塗装に比べ工程数も多く難しいと言われています。目的達成のための技法やノウハウも複雑で繊細さを求められる場面も少なくありません。いわゆる「センス」をどのように伝え、実際に作業できる人を育てていくのか、古くて新しい大きな課題です。木材塗装の世界では、デジタル活用による技術継承の実用化にはもう少し時間がかかりそうです。

これからも木塗研の変わらぬ使命のもと、人々の幸せと地球環境の調和を図り、将来展望を持って木材塗装の魅力を後世に伝えるための活動に注力して参ります。本年もよろしくお願い申し上げます。